

1 収 集

(1) 目 的

優れた美術品を「県立美術館作品収集方針」に基づいて体系的に収集し、美術品の量的、質的な充実を図る。

(2) 収集方針

- ・17世紀以降、日本と西洋で制作された風景画の収集に努める。
- ・ロダンを中心とする国内外の近代以降の彫刻作品の収集に努める。
- ・20世紀以降の美術の動向を示す作品の収集に努める。
- ・静岡県ゆかりの作家、作品の収集に努める。
- ・富士山をモチーフとした作品の収集に努める。

※作品保有状況 (令和5年3月31日現在) (単位：点)

作品保有状況	日本画	油彩画	水彩画	素描	版画	書	彫刻	工芸	写真	その他	合計
	363	276	55	118	1,403	347	89	10	64	99	2,824
主要収蔵作品	蘭亭曲水・龍山勝会図屏風（池大雅、重要文化財）、樹花鳥獣図屏風（伊藤若冲）、ラ・クロッシュ（佐伯祐三）、考える人、地獄の門（ロダン）、ルーアンのセーヌ川（モネ）、無題（No. White A.Z.）（草間彌生）等										
基金保有作品	家畜番の少女（ゴーギャン）、サン・トロペ、グリモーの古城（シニャック）、武蔵野図屏風（作者不詳） 蘭亭曲水図屏風（久隅守景）、石橋のある風景/水車のある風景（フランソワ・ブーシェ）、富士之図（黒田清輝）										

<令和4年度の取得状況>

【寄贈作品（計76件）】

村上隆「未知なる次元への旅立ち」ほか75件

3名の方から寄贈を受けた。このうち、太田正樹氏からは平成20年度以降継続して寄贈をいただいております、今年度の70点を含めて総数は106点に及ぶ。

2 保 存

年間を通して館内外の生物環境調査を行い、作品の保全に適した環境を維持している。今年度の寄贈作品の作品を含め、計6点の修復を行った。また、ロダン館及びブリッジ・ギャラリー彫刻の清拭を行った。

作 家	作 品 名	修復等内容
丹波 勝次	NO HOOKS	固着、クリーニング、整形、補強、補真、補彩
石川 欽一郎	奥多摩浅川	クリーニング、額装改善
イ・ブル	モンスタードロイング	マット装改善
イ・ブル	モンスタードロイング	マット装改善
イ・ブル	モンスタードロイング	マット装改善
イ・ブル	モンスタードロイング	マット装改善

令和4年度当初からデジタルアーカイブを公開し、大きなトラブルもなく運用することができている。

3 展 示

(1) 目 的

県民に国内外の優れた美術作品の鑑賞の機会を提供するため、各種の美術展を企画・開催した。

(2) 令和4年度展覧会開催結果

(令和5年3月31日現在)

展覧会名		会 期	観覧者見込 (人)	観覧者実績 (人)
企画展	大展示室展	4/2～5/15 (45日間)	—	7,116
	兵馬俑と古代中国	6/18～8/28 (63日間)	72,000	63,254
	絶景を描く	9/10～10/23 (38日間)	7,000	4,721
	みる誕生 鴻池朋子展	11/3～1/9 (54日間)	8,000	8,642
	近代の誘惑	2/18～3/26 (33日間)	7,000	5,461
収蔵品展 (内訳は以下のとおり)			12,000	8,296
計			106,000	97,490
移動展	富士市文化会館ロゼシアター	11/19～11/27 (9日間)	12,000	1,371

※収蔵品展

収蔵品を幅広くご覧いただくため、日本画や西洋絵画、現代美術等ジャンルごトテーマを設定して展示を構成する。令和4年度収蔵品展は次のとおり。

展覧会名	会期
新収蔵品展	5/24～7/18
絶景考 I・II	I : 7/20～9/19 II : 9/21～11/20
輞川図と蘭亭曲水図	11/22～1/9
光-The Light	2/14～4/9

◎企画展、収蔵品展の観覧者数内訳は資料2を参照

4 教育普及

(1) 目 的

県民の創作意欲に応える実技系事業及び学校と連携した教育普及プログラムを実施するとともに、展覧会に関連した各種普及事業を開催する。

(2) 実績

体験系・講義系ともに新型コロナウイルス感染症の対策を取りつつ、予定したプログラムをすべて実施することができた。

企画展ごとに館長による美術講座を開催したほか、アーティストを呼んでのトーク、専門性の高いシンポジウムなど、幅広く多彩な事業を開催した。また、学芸員によるフロアレクチャーが再開された。

(令和5年3月31日現在)

事業計画		事業実績
教育普及プログラム参加者総数 (実技・体験+講座・講義+学校連携)		9,433人 ・プログラム数27本
実技 ・体験	県民の創作意欲に応える実技系事業の開催 (創作週間、えのぐ開放日、ねんど開放日、わくわくアトリエ等)	3,582人 ・プログラム数11本
講座 ・講義	特別講演会、館長美術講座、フロアレクチャー等の開催	2,172人 ・プログラム数5本
学校連携	美術館教室等の開催(出張美術講座、学校向けギャラリーツアー等) オンライン鑑賞教育プログラムの開発 ・デジタルアーカイブを活用した小・中学校向けオンライン鑑賞教育プログラムを開発した。学校現場の協力を得て試行を重ね、プログラムの改良や先生向けの手引書作成により内容を充実させたうえで、令和5年度当初の本格稼働に結びつけた。	3,679人 ・プログラム数11本

5 調査研究

(1) 学芸課研究会の実施

毎月1回のペースで学芸課職員による研究会を実施している。発表時間約40分の後、質疑応答約20分。研究会のテーマは自由に設定し、発表後は館長及び課員との質疑応答を行うことで、研究成果を共有し、有益な示唆を得る機会となっている。

- ① 中原佑介の「ナンセンス」を読む (5月 川谷承子)
- ② 久隅守景『蘭亭曲水図屏風』試論 (6月 野田麻美)
- ③ 永村茜山《伊豆七島真景図巻》一関連諸本の比較と制作方法について—
(7月 浦澤倫太郎)
- ④ 中村岳陵《婉賦水韻》について (10月 石上充代)
- ⑤ 日本近代デスマスク小史 (10月 喜多孝臣)
- ⑥ ジャン・バルボー『最も美しき古代ローマのモニュメント』における
ポンペイ遺跡の図版について (12月 南美幸)
- ⑦ ピラネージの版画技法について (12月 新田建史)
- ⑧ ゴーガン作《オヴィリ》について (2月 貴家映子)
- ⑨ 天地耕作によるパフォーマンスについて (3月 植松篤)
- ⑩ 令和4年度の実技室の活動と教育普及活動について (3月 奥村祐喜)

(2) 美術館研究紀要の発行

2本の論文を収録した。

- ・新田建史「ピラネージの版面技法について」
- ・喜多孝臣「日本近代デスマスク小史―石膏型取りと彫刻のあいだをめぐって」

(3) 博物館実習の受入れ

8月8日（月）から12日（金）までの5日間、6大学8名の学生を受け入れた。

(4) 書庫・図書室の運営

限られた図書購入予算の中、優先順位をつけて図書を購入した。

- ・刊行図書 11冊、美術雑誌 220冊

図書閲覧室は図書ボランティア（33名）の協力により、175日間開室した。

図書関連のデジタルアーカイブに関しては、新たに受け入れた図書については速やかに登録・公開を行い、順調にデータ数を増やしている。管理面では、雑誌やその他の定期刊行物の目録を新たに登録し、書庫内の資料を一元的に管理するシステムが構築できた。

6 広 報

昨年度に引き続き、様々な広報手段を活用し、県内外への広報を推進し、さらに企画展の共催者・協賛者等と協働による広域的な広報を行った。

(1) 情報発信機能の強化

ア ホームページ、フェイスブック、インスタグラム、ツイッターによる情報発信と、訪問者の情報解析等

イ 展覧会等イベント情報のマスコミへの資料提供（記者投げ込み、プレスリリースの利用）

ウ 各展覧会の客層を考慮したポスター、チラシの配布、駅貼り、車内吊り

エ 県広聴広報課との連携（県民だより・県公式アカウントによるLINE・ツイッター・フェイスブック、インスタグラム、ラジオ、静岡駅地下街ショウケース電照看板、包括連携協定による広報物掲示・配架）

オ ボランティア・広報サポーターへの情報提供

カ 展覧会共催者（新聞社・テレビ局）、等との連携

キ 企画展に関連する講演会・イベントを館内で行い集客を図る

ク 美術館ニュース「アマリリス」の発行

ケ インターネットミュージアム等の美術館・博物館情報サイトでの情報発信

コ 共同通信PRワイヤーを利用した国内メディア向けオンライン・プレスリリースの配信

サ 静岡県立美術館デジタルアーカイブの充実

- ・作品作家情報の精度向上
- ・デジタルアーカイブのコンテンツを利用した教育プログラムの充実

シ ロダンウィーク

- ・平成26年度にロダン館開館20周年を契機として立ち上げたロダンウィークを令和4年11月3日（木・祝）～11月6日（日）に2年ぶりに開催した。
- ・「ロダン賞コンサート」や草薙マルシェ実行委員会との協働による「丘の上のロダンマルシェ」などを実施し、ロダン館への誘客を図った。
- ・イベント全体で、6,000人を超える集客実績があった。

(2) 教育機関との連携

ア 職員による教育支援等の講義

- ・静岡大学出講
「地域の人と文字文化」（5月23日、30日）
「地方の美術館の現状について」（思想と芸術B、12月14日）
- ・静岡県立大学出講
「歴史から読み解くしずおか学B」（6月22日）
「近代フランスの風景画から考える『絶景』」（国際関係学部特別講座、11月24日）
- ・静岡文化芸術大学出講
「美術史（西洋）Ⅱ 特別講義」（6月30日）
「静岡のアートシーンと天地耕作展の立案について」（博物館学概論、1月20日）

イ 県内4大学の学生への広報

大学生の入場料が無料となる自主企画展において、美術館周辺大学の学生に向けたメールでの広報を実施。

ウ 各学校の美術館利用促進

小中高・特別支援学校、私立学校の校長会や研究会等において、オンラインや対面で、学校利用の案内をおこなった。

年度末に、県内小・中・高・特別支援学校へ年間スケジュール・美術館教室のしおり等を配付した。令和5年度に向けては、学校団体利用の際のポイントなどを記載した企画展利用案内を当館ウェブサイトに掲載、周知を図り、利用促進に努めた。

(3) 観光業界等との連携

ア 地域との連携

これまでの地域等との連携をさらに深めた。

(ア) 県立美術館ボランティア

- ・任期3年目にあたる昨年度は募集の年であったが募集をせず、任期延長を希望した102名により活動を継続した。活動を休止していたギャラリーツアーグループや学校グループについては、日本博物館協会の新型コロナウイルス感染症予防のガイドラインを鑑み、年度途中から実施可能とした。本年度はボランティアの募集を行った。任期を1年として更新可能とすると同時に、年齢を20歳から18歳に引き下げ、学生等の若年層にも参加しやすいものとした。選考と研修を行い、125名の方をボランティアとして登録した。
- ・活動期間（任期）：令和5年4月1日～令和6年3月31日（更新可能）
- ・活動方針：「来館者サービスの充実、美術館運営支援、地域連携推進」

(イ) 県立美術館友の会

- ・友の会は、県立美術館の活動を後援することによって、芸術文化の向上を図ることを目的とする親睦団体である。新型コロナウイルスの感染状況を注視しながら、友の会会員向けの学芸員によるレクチャー、館長講座、研修旅行などの行事を開催した。
また、会員が編集した友の会だより「プロムナード」を年2回（4月、12月）発行した。
新型コロナウイルス感染状況に鑑み延期していた発足35周年記念事業について、本年度実施した。内容は、県民ギャラリーにおける会員展、同展にあわせた館長講演会、記念研修旅行（青森方面、館長同行）、友の会だ

より記念号の発行などである。

(ウ) ムセイオン静岡

- ・谷田地域の文化教育7機関（県立大学、美術館、中央図書館、埋蔵文化財センター、SPAC、グランシップ、ふじのくに地球環境史ミュージアム）が多分野における連携を進め、更なる文化の情報発信を目指す。
- ・ムセイオン静岡協働イベント「文化の丘フェスタ」（令和4年10月18日（火）から11月6日（日）まで実施）においてスタンプラリーを実施し、周知を図った。
- ・ムセイオン静岡主催事業として、展覧会解説「「みる誕生 鴻池朋子展」を学芸員と一緒に巡ってみよう」を開催した。（12月21日）

(エ) 草薙商店会等

- ・草薙地域で活動しているグループと連携して美術館前の広場でロダンウィークに「丘の上のロダンマルシェ」を開催した。（11月3日（木・祝））

イ 企業との連携

・企画展における企業との連携

館内レストランにおいて、県産品を使用したメニューを開発して提供した。

(4) 新たな取組み

ア 「みる誕生 鴻池朋子展」では、目が見えない方や見えにくい方向けのワークショップおよび展覧会告知のため、静岡県視覚障害者情報支援センターをはじめとした機関へのチラシの発送、および静岡視覚特別支援学校へは直接訪問しての広報活動を行った。

イ 「近代の誘惑」展では、旅行会社による美術館めぐりツアーへの協力を行った。

ウ 「近代の誘惑」展においては、ボランティア（地域連携・草薙ツアーグループ）と協力し、出品作品をモチーフとした和菓子の創作とそれを活用したイベントを実施した。

エ 「ガストロノミーツーリズム」事業として、館内レストランで県産品を活用したメニューを提供した。

7 環境・施設整備

(1) 施設の適切な管理と快適な環境の整備

- ・ロダン館1階ホール照明をLED照明に更新し、より快適な鑑賞空間となった。
- ・監視カメラ、本館ファンコイルユニット、本館蓄電池設備及びレストラン給水配管の更新等、経年劣化した設備の更新を行った。

(2) 来館者の満足度の向上の取組

- ・観覧料支払いのキャッシュレス化を開始した。

8 運営

(1) 運営基盤の拡充（収入の確保）

- ・「鞆川図と蘭亭曲水図」関連シンポジウムおよび記録集の刊行は、助成金の獲得により充実を図ることができた。

(2) 企業との連携強化による運営の充実

ア 静岡県経営者協会との連携

- ・静岡県経営者協会の全会員に令和4年度の美術館年間スケジュールや企画のちらしを配布した。
- ・静岡県経営者協会会員の交流会に参加し、館長および学芸員による会員向け講座を予定していたが、新型コロナ感染状況の悪化により中止となった。

9 新型コロナウイルス感染拡大防止対策

(1) 展示

「県有施設における感染防止方針」に基づく感染防止対策を講じた上で展覧会を開催した。

- ・関係機関から最新情報の収集に努め、感染予防、感染防止に最新の注意を払う。
- ・スタッフのマスク着用、受付への飛沫防止シールド設置、手指消毒液の設置、サーモグラフによる検温で体温を確認等、感染症拡大防止への対策を実施する。
- ・混雑した場合は入場制限を実施する。
- ・混雑が予想された「兵馬俑と古代中国」展は事前予約制を導入した。
- ・「絶景を描く」展からはキャッシュレス決済を導入した。

(2) 教育普及

事業内容や新型コロナウイルス感染症の状況を考慮しながら、臨機応変に事業を実施した。

ア 体験

コロナ禍でも体験活動が継続できるよう、定員削減やプログラム内容の検討等を行い、実施した。基本的な対応として、参加者の連絡先の把握や道具の共有の回避などを行っている。プログラムによって感染リスクの順位を付け、それに応じて実施を検討、判断した。年間を通して中止となったプログラムはなかった。

イ 講義

学芸員による「フロアレクチャー」を再開した。来館者数が特別多い「兵馬俑と古代中国」展を除き、ハンズフリー拡声器を使用し、実施可能とした。「特別講演会、シンポジウム」や「美術講座」も昨年度に続き、実施できた。

ウ 学校連携

「美術館の秘密をさぐれ」は、順路を変更するなどの対応をすることで再開した。また、「ねんど教室」「えのぐ教室」については、定員を半減し、他団体との合同での参加は不可とすることで、感染リスクの低減を図っている。教材貸出については、貸出間隔を2週間空けることで、感染リスクの低減を図っている。教員研修についても主催者からの依頼に基づき実施した。

(3) 県立美術館ボランティア

令和3年度に引き続き、図書閲覧室グループ、資料整理グループ、実技室グループは対策の上、活動を継続している。地域連携・草薙グループは茶園管理を主としていたが2月から茶会を再開した。日本博物館協会による9月の予防のガイドライン変更を受け、学校グループ、ギャラリーツアーグループについて、感染対策を行いつつ、実施可能とした。実際の活動については、学校グループは申込がなかったため活動はなく、ギャラリーツアーグループは研修の都合から2月に再開した。